

## 岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第16報）

—— 上開田・戸入・下開田のわらべうた ——

仲野悦子・高木靖弘

### An Interim Report on the Oral Literature of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture (16)

—— The WARABEUTA in Kamikaiden・Tonyu・Shimokaiden ——

Etsuko Nakano and Yasuhiro Takagi

We have investigated on the oral literature, wishing the creation of culture for the sound development of children.

In this paper we report on the WARABEUTA in Kamikaiden, Tonyu and Shimokaiden of Tokuyama Mura.

#### はじめに

ここに報告する「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第16報）——上開田・戸入・下開田のわらべうた——」は、同標題第I報（本原紀要第五集所載）、第III報（同第六集所載）、第VI報（同第七集所載）、第VII報（同第八集所載）、第X報（同第九集所載）につづくものである。

今回の調査では、調査を始めてより5年、最後に残されていた上開田地区と、戸入及び、下開田に補充調査に入った。

初めて入った上開田地区では、戸数が少ないこともあって、上開田生え抜きの演唱者を得ることが、極めて困難であった。したがって一人の演唱者から、2曲しか採譜できなかったが、存在が確認できた曲が6曲ほどあった。

戸入、下開田では、今までの演唱者に加えて、今回初めて会う4人の演唱者も加わって、戸入では8曲、下開田では5曲の資料を得ることができた。さらに、上開田在住で、門入出身の演唱者から得られた1曲を加えて、今回の調査では、計16曲の資料を得たことになる。

5年に亘った調査の結果、徳山村全地域から、105曲の資料を得た。徳山村のわらべうたに関しては、本標題第I報、第III報、第IV報、第VII報、第X報、そして、本報第16報と6報に亘って報告した。

その都度、分布、伝承等一定の考察を加えてきたが、次報でもって、総括的にまとめ、本報告の総まとめとして、この報告を終りたいと考える。

## I

### 〈調査地域及び、期日〉

岐阜県揖斐郡徳山村上開田

細尾ひめの氏宅にて

1983年8月10日 午前10:00~12:00

岐阜県揖斐郡徳山村戸入

増山たづ子氏宅にて

1983年8月9日 午後2:00~4:00

岐阜県揖斐郡徳山村下開田

江崎さき氏宅にて

1983年8月9日 午後7:40~9:00

### 〈演唱者について〉

上開田地区は、現在、50戸余り、その中でも、いわゆる地付きの世帯は30戸足らずであり、子どもの頃、一緒に遊んだ同年代の演唱者を得ることが極めて困難な地区であった。そんな中で、今回は、細尾ひめの氏、門輪たけ氏のお二人から、話を聞くことができた。なお、門輪氏は、門入出身で、結婚によって下開田在住となられた方である。

戸入では、これまでの、増山たづ子氏、山本花枝氏に加えて、坂本おふく氏、広瀬小菊氏の2名を新たに交えて、4名からお話を聞くことができた。4名のいずれもが、戸入で生れ、成人し、現在も戸入で生活している方々である。

下開田では、今までの、江崎さき氏、宮崎おとき氏に加えて、新たに、大牧すえの氏、安藤とめの氏の2名に加わって頂き、4名から、話を聞くことができた。4名のいずれもが、下開田で生れ、成人し、現在下開田在住の方々である。

以下に、演唱者の生年月日を記す。

細尾ひめの（上開田） 1911年（明治44年）10月10日

門輪たけ（上開田） 1910年（明治43年）2月27日

増山たづ子（戸入） 1917年（大正6年）4月15日

山本花枝（戸入） 1905年（明治38年）7月16日

坂本おふく（戸 入）	1905年（明治38年）	3月3日
広瀬小菊（戸 入）	1911年（明治44年）	4月12日
江崎さき（下開田）	1899年（明治32年）	9月26日
宮崎おとき（下開田）	1902年（明治35年）	9月16日
大牧すえの（下開田）	1902年（明治35年）	9月5日
安藤とめの（下開田）	1899年（明治32年）	9月6日

## II

## 〈上開田のわらべうた〉

ここ上開田では、採譜できた曲は極めて少ない。中でも、門輪氏の歌った「ぜんまいわらび」（曲番92）は、氏が子どもの頃、門入で習い覚えたものであるから、門入のわらべうたとすべきものである。なお、以下に記す6曲の曲名は、お二人のお話を聞く中で、採譜はできなかったが村内他地区に存在するものの同歌として確認できたものである。

- あつたら松や（同歌曲番1. 17. 43. 67. 86）
- こんめおした（同歌曲番26. 48）
- おかこおかこ（同歌曲番46. 58. 82）
- じょりかくし（型は不明）
- 大波小波（同歌曲番12）
- 一かけ二かけ（同歌曲番105）

## 90. こっから見えるは（てまり唄）

演唱者 細尾ひめの

No.90



こっからみえるはなごややないか なごやむすめは



じゅんじょなむすめ ななつやつからべにおしろいで



もんのそとへとあすびにでたら おわかいしゅうやー

こわかいしゅうにだきしめられておちちがいたい  
 はなしておくれおちちがいたてもはなさんからに  
 ぼんがくるからおびかっておくれあかがよいか  
 しろいがよいかあかきもいやがしろいもいやが  
 とうせばやりのーはーかた おびはかたおび

(出発実音変ホ M.M.120. 採譜高木)

### 歌詞

こっから見えるは名古屋やないか  
 名古屋娘はじゅんじょな娘  
 七つ八つから<sup>べに</sup>紅 おしろいで  
 門の外へとあすびに出たら  
 お若い衆や小若い衆に抱きしめられて  
 お乳が痛いで離しておくれ  
 お乳が痛ても離さんからに  
 盆が来るから帯買っておくれ  
 赤いがよいか白いがよいか  
 赤いもいやが白いもいやが  
 当世ばやりの博多帯 博多帯

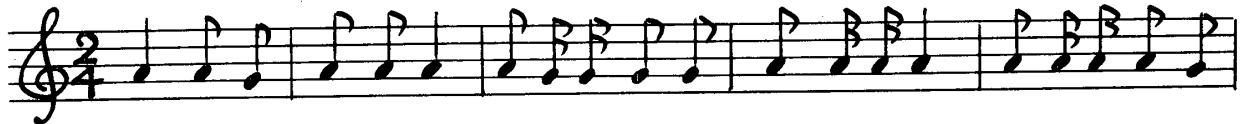
この曲は、戸入を除く村内全域で同歌（曲番9. 24. 39. 57. 63. 73. 88）が見られ、採集量も最も多い。ことに下開田のもの（曲番88）と比較してみると、旋法、旋律において全く同一といってよい。詞において、名古屋子ども→名古屋娘に替っているだけで、その他には、ほとんど差違を指

摘することはできない。

91. ぜんまいわらび （鬼きめ唄）

演唱者 細尾ひめの

No.91



ぜんまい わらび どうしてこし かがんだ おやの日に



えびくってほうしてこし かがんだ

（出発実音 = M.M.126. 採譜高木）

歌詞

ぜんまいわらび どうして腰かがんだ  
親の日にえび喰って ほうしてかがんだ

この曲は、現在までに本郷、下開田で採集されたもの（曲番13. 89）の同歌である。さらに後出の門入、戸入のもの（曲番92. 93）とも同歌であり、西谷川沿いの集落にはすべて存在を確認することが出来た。

旋律は極めて単純で、ソ、ラの二つの隣り合う音からなり、核音は上の音、すなわちこの場合、ラである。本郷、下開田のものが、四度、五度の音域であったのに比して、こちらは二度と、狭くなっている。

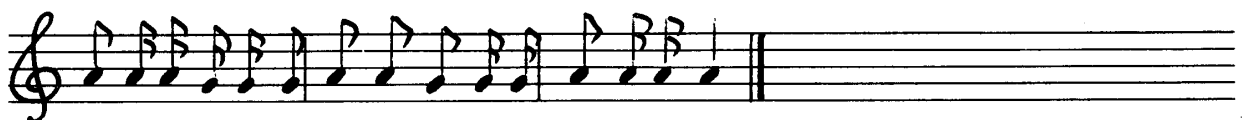
92. ぜんまいわらび （鬼きめ唄）

演唱者 門輪たけ

No.92



ぜんまい わらび なんでこし たごんだ おやの日に



さかなたべてそいでこしが たごんだ

(出発実音ニ. M.M.112. 採譜高木)

## 歌詞

ぜんまいわらび なんて腰たごんだ  
親の日に魚<sup>さかな</sup>食べて そいで腰がたごんだ

演唱者門輪たけ氏は、門入生れの門入育ちで、結婚によって上開田に住むようになった人である。すなわち、この曲は、門入で習い覚えたものであり、門入のわらべうたである。

前曲細尾ひめの氏のものとは、旋律、旋法ともほぼ同じであるが、詞において、腰がかがむ→腰がたごむ、えび食って→魚食べて、と替っている。

〈戸入のわらべうた〉

## 93. ぜんまいわらび (鬼きめ唄)

演唱者 坂本おふく

No.93

ぜんまいわらび なんてこしがゆがんだ おやの  
おたやに ととめくって ゆがんだ

(出発実音ホ M.M.144. 採譜高木)

## 歌詞

ぜんまいわらび なんて腰ゆがんだ  
親のお逮夜<sup>たや</sup>に ととめ喰ってゆがんだ

この曲は、前出上開田(曲番91)、門入(曲番92)、さらには本郷(曲番13)、下開田(曲番89)のものと同歌である。この曲を含めて以上5曲でもって、下開田に始まり、本郷、上開田、戸入、門入の西谷川沿いの五つの地区のすべてに存在が確認できたことになる。しかし、東谷川沿いの、山手、榎原、塚の三地区には、未だ存在が確認できない。

5曲とも、詞において、大意はすべて同一であるものの、最も興味ある違いは、腰が曲がるという表現が、それぞれの地区によってすべて違っているということである。すなわち、

下開田……… 腰がえがむ

本郷…………… 腰がわがむ  
 上開田…………… 腰がかがむ  
 戸入…………… 腰がゆがむ  
 門入…………… 腰がたごむ

以上の如くである。日常、用いている方言がそのまま、それぞれの地区の曲に表われているのである。

#### 94. 大風ふけまんじゅくれ（となえ唄）

演唱者 山本花枝 増山たづ子

No.94



おお かぜ ふ け まんじゅ くれ おお かぜ ふ け まんじゅ くれ

（出発実音ト． M.M.120. 採譜高木）

歌詞

大風吹け まんじゅくれ  
 大風吹け まんじゅくれ

この曲は、風たたかしの時に、大人たちの仕事のかたわらで、大声で歌ったものだそうである。風たたかしというのは、箕で、穀物などの籾殻を風にあおって屑をとり除く農作業のことである。そんな時には、いい風が吹いてくれるように歌ったものであろう。

旋律も、三つの音から成る単純なもので、核音は真中の音、すなわち、この場合はレとなる。

#### 95. ちゃんちゃん茶まがに（となえ唄）

演唱者 山本花枝 増山たづ子

No.95



ちゃんちゃん茶まがに 茶がわいた じいさんばあさん おきやんせ

（出発実音ト． M.M.132. 採譜高木）

歌詞

ちゃんちゃん\*茶まがに茶がわいた

じいさん ばあさん 起きやんせ

\*茶まが……茶釜

この曲は、春四月、あけびの花が咲く頃、そのあけびの花の雌しべを取って、手の平に乗せて、その手首を手刀で叩きながら歌うのだそうである。叩くにつれて、その雌しべが起き上がってくるのである。あけびの花が、茶釜に似ているところからこの歌を歌うとのことである。

旋律は、二つの音から成る極めて単純なものである。

96. すすれすすれ (てまり唄)

演唱者 坂本おふく

No.96

すすれすすれ 一杯すすれ いっぱいのんだら  
くちべにつけて くちべにつけたらおしろいつけよ

(出発実音ニ. M.M.108. 採譜高木)

歌詞

すすれすすれ 一杯すすれ  
一杯のんだら 口紅つけて  
口紅つけたら おしろいつけよ

この曲は、村内ほぼ全地域に存在が確認できた。ここ戸入のものは、他のものと比べて、極めて短く、詞においても、欠落しているように思われるが、演唱者自身は、これで終りだったと断言した。旋律的には、他のものとほとんど違いはなく、同一といってもよい。

旋法は、ラ、ド、レ、ミ、の音列を用いた陽旋法で核音は、ラ、レである。

97. 宮の前から (てまり唄)

演唱者 坂本おふく 山本花枝

No.97



みやのまえから - みずがでてきて - おまん  
 こそでをながいたおまんこそでを - み - つかさねて  
 ながいたそれはおしこと - みずというじを - かいて  
 ながせばよかった ちょいと いかん わたい た

（出発実音ニ． M.M.112. 採譜高木）

歌詞

宮の前から 水が出てきて  
 おまん 小袖を流いた  
 おまん 小袖を三つ重ねて流いた  
 それは惜しいこと 水という字を  
 書いて流せば よかった  
 ちょいと 一かんわたいた

この曲は、4年前、増山たづ子氏より採集したもの（曲番21）と同歌である。詞においては、全く同一であるが、旋法において、増山氏のは陽旋法、今回の坂本・山本氏のは陰旋法と、全く対照をなしている。しかし旋律的には、Minor になっただけで、ほとんど同一といってもよい。

旋法は、ラ、シ、ド、ミ、ファ、の音列を用いた陰旋法で、核音は、シ、ミ、である。

98. 中の中のこぼとけ （鬼あそび唄）

演唱者 増山たづ子

No.98

な かの な かの こぼと け なん で せ が

ひく な っ た お や の 日 に と と く っ て  
 そ ん で せ が ひ く な っ た う し ろ の 正 面  
 だ ー れ い っ ち ょ う ま た ち が っ た

(出発実音変イ. M.M.108. 採譜高木)

## 歌詞

中の中のこぼとけ  
 なんで背が低なった  
 親の日にとと喰って  
 そんで背が低なった  
 うしろの正面だーれ  
 ○○ちゃん  
 一ちょうまた違った

この曲の遊びは、人当て鬼で「かごめかごめ」などと同様である。類歌は全国的に見られるが、村内では、門入に同歌が見られる(曲番31)。戸入と門入の違いは、こぼとけと小坊主が替っているのみで、あとは全く違いは認められない。旋律的にもほとんど差はない。

旋法は、門入同様、ラ、ド、レ、ミ、の陽施法で、核音は、ラ、レ、である。

## 99. こかおこかお (子もらいあそび唄)

演唱者 坂本おふく・増山たづ子

No.99

こ か お こ か お ど の こ が ほ し い



（出発実音ニ． M.M.92. 採譜高木）

歌詞

「子買お 子買お」「どの子が欲しや」  
 「小菊（人名）が欲しい」「何喰わして人ならせる」  
 「大根喰わして人ならせる」「行ってやれ子ども」

この曲の同歌は、山手（曲番46）、樋原（曲番58）、下開田（曲番82）に見られる。三者に比べ、この曲は極めて短いが、本来は、三者と同様に、その時々、買い手と売り手のおもしろい歌問答が続くのであろう。また三者がそれぞれ「おかくかく」「おかくかくかく」「おかくおかく」と変化しているのに対して、ここ戸入のものは、「子買お子買お」とはっきり歌いだしている。

旋法は、ミ、ソ、ラ、の三つの音を用いたテトラコードで、核音は、ラ、である。

100. いちれつらんばん（てまり唄）

演唱者 増山たづ子

No.100





へい しぬまで つくすは にほんのへい  
 て ろくにん のこして みなごろし  
 は ハルピン までもー せめいって  
 り とうごう たいしょう ばんばんざい

(出発実音ト. M.M.116. 採譜高木)

### 歌詞

いちれつらんぱん破裂して  
 日露戦争はじまった  
 さっさと逃げるはロシアの兵  
 死ぬまでつくすは日本の兵  
 五万の兵をひきつれて  
 六人残して皆殺し  
 七月十日の戦いは  
 ハルピンまでも攻めいって  
 クロバトキンの首をとり  
 東郷大将バンバンザイ

この曲は、明治時代末期から全国的に流布した曲で、日露戦争（1904・5年）を題材し、手まり唄、あるいはお手玉唄として流行したものである。一から十までの数え唄風につくられ、旋律は当時の軍歌「道は六百八十里」が当てられている。

ここ徳山村では、はじめて採集したけれども、村内各地区でも必ず採集できるものと思われる。

### 〈下開田のわらべうた〉

#### 101. てんまりやてんまりや（てまり唄）

演唱者 大牧すえの

No.101



てんまりやーてんまりや みせのやぐらにこしかけて



きょう たつ かー あす たつ か きょう も た たん が あす も た たん さ  
 ん じゅご ん ち にゃ た つ け れ ど と お か は つ か にゃー まー た た  
 た ぬ まだ た た ぬ ちょいと いっ かん わ た い た

（出発実音嬰ハ、M.M.120. 採譜高木）

歌詞

てんまりや てんまりや  
 店のやぐらに 腰かけて  
 今日発つか 明日発つか  
 今日も発たんが 明日も発たん  
 三十五日にゃ 発つけれど  
 十日、二十日は、まだ発たぬ まだ発たぬ  
 ちょいと一かん わたいた

この曲は、前回同じ下開田地区江崎さき氏より採集したもの（曲番79）と同歌である。

今回、大牧すえの氏が歌ったものは、江崎氏のものが、前段部分が欠落していたが、それが補なわれる形で歌われている。したがって、詞においては全く同一で違いは見られない。

施律的には、前者が、陰音列から始まり、後半に至り陽音列に転調して終わっていたのに対して、この曲は、最初から終りまで、陽音列で通されている。旋法は、陽旋法で、最後の部分は律旋法になっている。核音は、ミ、ラ、最後の部分は、レ、ソ、となっている。

102. うちのおきくは （てまり唄）

演唱者 江崎さき・大牧すえの

No.102



うちのおきくはなぜものくわぬ はらが いたい か



なつやみ するか はらも いとない なつやみ もせぬ



はらに ややーこの つぼみが できて もうし そのこが



おんなの こなら か わへ ながして かわの



かみーさま ころして おくれ もうし そのこが



おとこの こなら てらへ あずけて てならい



させて てならい きらいで ばくちが すきで てらの



えんーから つきおと されて いたい くちおし なみあみ



だぶつ めいしゃ を よぼか おお



しゃ を よぼか めいしゃも おおしゃも おな



じこと おなじこと ちよいと いっかん わたい た

(出発実音変ホ. M.M.126. 採譜高木)

## 歌詞

うちのおきくは なぜもの喰わぬ  
 腹が痛いか 夏病みするか  
 腹も痛ない 夏病みもせぬ  
 腹にやや子の つぼみができて  
 もうし その子が女の子なら  
 川へ流して 川の神さま殺しておくれ  
 もうし その子が男の子なら  
 寺へあずけて 手習いさせて  
 手習い嫌いで 博突ぼくちが好きで  
 寺の縁から 突きおとされて  
 痛い 口惜し \*1なみあみだぶつ  
 眼医者をおおしゃ \*2おおしゃをおおしゃ  
 眼医者もおおしゃも 同じこと同じこと  
 ちょいと一かん わたいた

\* 1 なみあみだぶつ……なむあみだぶつ

\* 2 おおしゃ……………お医者

この曲の同歌は、山手（曲番42）、櫛原（曲番59）、塚（曲番66）で採集されている。ここ下開田のものを加えて四曲のいずれもが、変拍子で、二拍子と三拍子が規則的に繰り返されている。中でも、山手、塚（曲番42, 66）が二拍子的傾向が強いのに対し、ここ下開田のものと同櫛原（曲番59）のものは三拍子的傾向が強い。手まり唄のみならず、わらべうた全体として考えてみても、三拍子というのは極めてめずらしい例である。

詞においては、四曲とも、大きな違いはなく、ほぼ同様である。

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の律旋法で核音は、レ、ソ、である。

## 103. でんでんたたくは （てまり唄）

演唱者 江崎さき・宮崎おとき・大牧すえの・安藤とめの

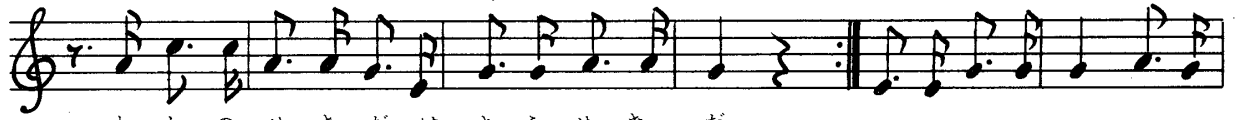
No.103



でんでん たたくは だれさん や ほんまちよ ちょの  
 おまえは なにしに きたわいの せきだの かわりに



じへえさん おまえのせきだはやすせきだ  
きたわいの きょうのいたやのでんしろは



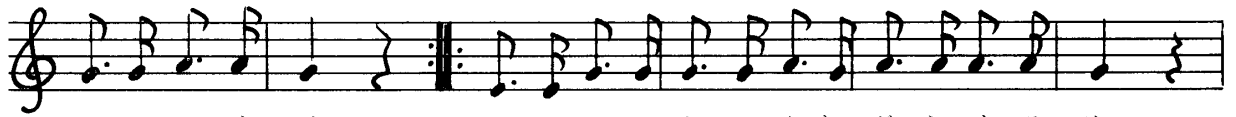
わしのせきだはきょうせきだ ことしはじゅうくで  
ひとりむすめをもちかねて



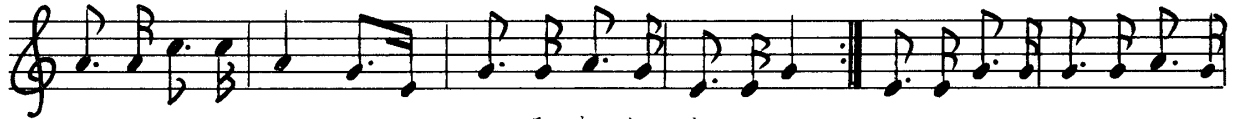
よめはたち よめのどうぐはなになにどうぐ



ぶんだいきょうだい きょうつづき ながもちななつに  
それほどそろえてやるほどに そろえてくるなよ



おびやすじ そろえてきたときやどうするじゃ  
おぼんじょろ しゅもくをもって一かねをもって



あたまをすって一ころもんきせて ひがしへむいても  
にしへむいても なみあみだぶつ



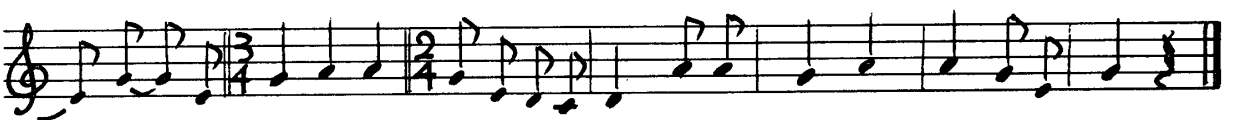
なみあみだぶつ にしもひがしも一ごらくじゃ



ごらくじゃ ごらくどうじょへまいてみりゃ



けっこなおにわにいとほりかけていとほるむすめは



一け一しのはな けしのはな ちよいと いった わたいた



（出発実音変ホ，M.M.120. 採譜高木）

## 歌詞

でんでんたくは誰さんや 本町横町の治兵衛さん  
 おまえは何しに来たわいの 雪駄せきだのかわりに来たわいの  
 おまえの雪駄は安雪駄 わしの雪駄は京雪駄  
 京のいたやの伝四郎は 一人娘をもちかねて  
 今年は十九で嫁はたち 嫁の道具はなにになに道具  
 文台，鏡台，京つづき 長持七つに おび八すじ  
 それほどそろえてやるほどに そろえて来るなよおばんじょろ  
 そろえて来たときゃ どうするじゃ  
 頭をすってこども衣ん着せて 榎木をもって鐘持って  
 西へ向いてもなみあみだぶつ 東へ向いてもなみあみだぶつ  
 西も 東も 極楽じゃ極楽じゃ  
 極楽どうじょへ参ってみりや  
 けっこなお庭に井戸堀りかけて 井戸掘る娘はけしの花けしの花  
 ちょいと一かん わたいた

この曲は、本郷で採集したもの（曲番3，15）と同歌である。ことに、本郷の斉藤みのえ氏の歌ったもの（曲番15）とは、詞においても施律においても、全く同一といってよいほど似ている。また、本郷でもそうであったが、極楽浄土を極楽どうじょと、いい間違えて伝えているのが、ここ下開田でも、全く同様に伝えられている。山手で歌われているもの（岐阜大学教育学部・郷土資料（5）岐阜県のわらべうた今昔、徳山村篇）では、正確に、極楽浄土と歌い伝えられている。

旋法は、レ，ミ，ソ，ラ，ドの律旋法で、核音は、レ，ソ，である。

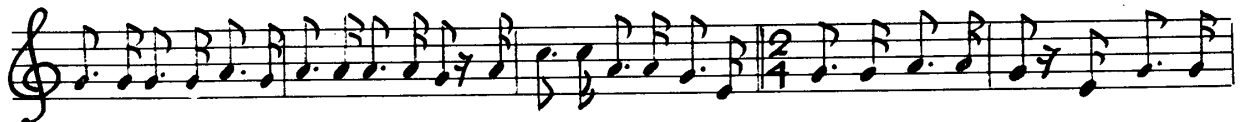
## 104. おとらの前髪（てまり唄）

演唱者 江崎さき

No.104



おとらのまえがみ だれわけたうつくしゃーうつくしゃき



りょをごばんに きりわけて きりときりめにはなさかせはなは



な に ば な - は な は た ち ば な - き ょ う は き ょ う ば な  
 き ょ う つ づ き き ょ う の い た や の で ん し ろ が

(出発実音嬰ハ. M.M.116. 採譜高木)

## 歌詞

おとらの前髪だれ分けた  
 美しや 美しや  
 きりよをごばんに きり分けて  
 きりときりめに 花咲かせ  
 花はなにばな 花はたちばな  
 京は京ばな京つづき  
 京のいたやの伝四郎は……………

この曲は、前回、曲番80として、江崎さき氏本人より採集した。その際は、歌い出し部分8小節程で、思い出されなかった。今回も、相当苦勞して思い出してはくれたが、途中から、前曲「でんでんたたくは」の「京のいたやの伝四郎は……………」以降の部分につながってしまい、どうしても完成することができなかった。

旋律も、前回は、陰音列が用いられていたものが、今回は、やはり、前曲の影響を受けてか、歌い出しより、「でんでんたたくは」と全く同一であり、陽音列で歌われている。旋法は、ミ、ソ、ラ、ド、の音列を用いた律旋法で、核音は、ソである。

## 105. 一かけ二かけ (てまり唄)

演唱者 江崎さき・宮崎おとき

No.105



い ち か け - に か け さ ん か け て し か け て ご か け て



はしを かけ はしの てすりに こしかけて はるかむこうを  
ながむれば じゅうしちーはちの こむすめが はなや  
せんこう てにもっ て ねえさん ねえさん どこいく  
の わたしは きゅうしゅう かごしま の さいごう  
たかもり むすめで す てっぽでうたれた ちちうえ  
の おーは かまいりに まーい ります  
まいりま す ちょいと いっ かん わ たい た

(出発実音ニ、M.M.96. 採譜高木)

## 歌詞

一かけ 二かけ 三かけて  
四かけて 五かけて 橋をかけ  
橋の手すりに 腰かけて  
はるかむこうを ながむれば  
十七・八の小娘が 花や線香手に持って  
ねえさんねえさん どこいくの  
わたしは九州鹿児島  
西郷隆盛 娘です  
鉄砲でうたれた 父上の

お墓参りに参ります 参ります

ちょっと 一かんわたいた

この曲も、「いちれつらんぱん」(曲番100)と同様、大正時代初期から全国的に流布した曲である。全国的には、手まり唄としてよりも、所作のついた手合わせ唄として流行したようである。この曲の原曲は、1884年頃(明治17年)、陸軍軍楽隊の指導をしていたフランス人ルルーにより作曲された「抜刀隊」で、この旋律を使って歌われている。同じ旋律を使ったわらべ唄には、手まり唄、お手玉唄として歌われる「一番はじめは一宮」がある。

しかし、ここ下開田で採集したものは、詞においては、全国的に流行したものと、ほとんど違いはないが、旋律においては、全く変わってしまっている。すなわち、「でんでんたたくは」「おとらの前髪」など、その他、徳山村内で一般的に歌われるわらべうたと、同化してしまっているのである。戸入での「いちれつらんぱん」が、ほぼ原曲通り、歌われていたのに比べると、興味深い現象である。一つ考えられることは、演唱者の年代の違いから、このような現象が起った可能性を考えることができる。ちなみに、戸入の演唱者は、60代の半ばであり、下開田は、80代半ばである

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列を用いた律旋法で、核音は、レ、ソ、である。

### III

#### 〈わらべうたの伝承について〉

この章においては、西谷五地区で存在が確認できた「ぜんまいわらび」について一考察を加えたい。殆んど同世代の演唱者によりうたわれたこのわらべうたは、詞において、各々の地区ごとに異なった特徴を見出すことができた。ここに楽譜を用いながら比較検討を試みる。

No.13 本郷

A

ぜんまいわらび どうしてこしわがんだ おやの日にさかなくてほんでこしわがんだ

No.89 下開田

B

ぜんまいわらび なんてこしえがんだ おやの日にえびくってそれでこしえがんだ

No.91 上開田

C

ぜんまいわらび どうしてこしかがんだ おやの日にえびくってほうしてこしかがんだ

No.92 門入  
ぜんまい わらび なんて こした ごんだ おやの日に さかな たべて そいで こしが た ごんだ

No.93 戸入  
ぜんまい わらび なんて こしが ゆがんだ おやの おたやに ととめくって ゆがんだ

表1 「ぜんまいわらび」の比較

		A	B	C	D	E
曲	番	Na13	Na89	Na91	Na92	Na93
地	区	本 郷	下 開 田	上 開 田	門 入	戸 入
演	唱 者	江口いとえ (生1903年)	江崎さき (生1899年)	細尾ひめの (生1911年)	門輪たけ (生1910年)	坂本おふく (生1905年)
音	域	4 度	5 度	2 度	2 度	2 度
詞	腰が曲がる 親の日に 魚食べて	わがんだ 親の日に 魚食って	えがんだ 親の日に えび食って	かがんだ 親の日に えび食らて	たごんだ 親の日に 魚食べて	ゆがんだ 親のお速夜に ととめ食って

このわらべうたの詞について、全体の大意においては、五地区とも全く同意であるが、表1にあげたごとく「腰が曲がる」、「親の日に」、「魚食べて」という意の部分が、各々の地区において異なっている。特に「腰が曲がる」の意の部分においては、わがんだ、えがんだ、かがんだ、たごんだ、ゆがんだとその地区ごとの言いまわしによって歌われていることである。他はあまり大きな違いは見あたらない。

旋律については、本郷・下開田地区が音の巾が広く、残りの地区は2度の音程の中で上下している。又リズムにおいては、全地区殆んどの違いは見られない。

### ま と め

今回の調査でも多くの資料を得た。最後の未採集地区、上開田をはじめ戸入、下開田を合わせ、計16曲のわらべうたが採集できた。(別表1参照)再調査した下開田・戸入地区において前回で得られなかった演唱者が4人も得られた事は、幸運な事であった。このような事は、他地区でも同じことで、まだまだ素晴らしい演唱者があるということと、採集しきれていないわらべうたが数多く残されているということを私たちに語っている。

採集する機会ごとにいろいろな課題が生まれ、その課題をもって次回の採集調査にあたってきたが、

今回の報告でもって、徳山村八地区（本郷，下開田，上開田，戸入，門入，山手，櫛原，塚）の一通りの採集調査を完了することができた。1978年9月に始まり，5年の歳月を経て一つの調査目標である「全村より採集を試みる」という課題は果された事になる。この中には，まだまだ多くの問題点（例えば，世代の違う層からの採集，目的意識的調査，子ども達からの遊びを含めた採集等）が残されている事も事実であるが，一応一つの大きな目標が完了したという意味で，「はじめに」で述べたように，一次調査を終りとした。

おわりに，今回の調査報告にあたって，演唱者である増山たづ子氏をはじめ，山本花枝氏，坂本おふく氏，広瀬小菊氏，江崎さき氏，安藤とめの氏，宮崎おとき氏，大牧すえの氏，細尾ひめの氏，門輪たけの氏の諸氏のご協力に対して，あらためて深大なる謝意を表したい。

### 参 考 文 献

- 社会思想社刊 尾原昭夫編著  
日本のわらべうた 室内・戸外遊戯編
- 柳原書店刊 尾原昭夫他編  
日本のわらべうた全集
- 岐阜大学教育学部編 郷土資料（5）  
岐阜県のわらべうた今昔 徳山村篇
- 徳山村史編集委員会編 徳山村史

別表1 徳山村採集わらべうた一覧 その3

曲番	題 名	分 類	採集地	採集年月日	演 唱 者	所 載
90	こっから見えるは	て ま り 唄	上開田	1983・8・10	細 尾 ひ め の	第16報(10集)
91	ぜんまいわらび	鬼 き め 唄	上開田	"	細 尾 ひ め の	"
92	ぜんまいわらび	鬼 き め 唄	門 入	"	門 輪 た け	"
93	ぜんまいわらび	鬼 き め 唄	戸 入	1983・8・9	坂 本 お ふ く	"
94	大風吹けまんじゅくれ	と な え 唄	戸 入	"	坂 本 お ふ く	"
95	茶ん茶ん茶釜に	と な え 唄	戸 入	"	坂 本 お ふ く	"
96	すすれすすれ	て ま り 唄	戸 入	"	坂 本 お ふ く	"
97	みやの前から	て ま り 唄	戸 入	"	山 本 花 枝	"
98	中の中の小ぼとけ	鬼 あ そ び 唄	戸 入	"	増 山 た づ 子	"
99	こかおこかお	子 も ら い あ そ び 唄	戸 入	"	坂 本 お ふ く	"
100	一れつらんばん	て ま り 唄	戸 入	"	増 山 た づ 子	"
101	てんまりやてんまりや	て ま り 唄	下開田	1983・8・9	大 牧 す え の	"
102	うちのおきくは	て ま り 唄	下開田	"	大牧すえの・江崎さき他	"
103	でんでんたくは	て ま り 唄	下開田	"	江 崎 さ き	"
104	おとらのまえがみ	て ま り 唄	下開田	"	江 崎 さ き	"
105	一かけ二かけ三かけて	て ま り 唄	下開田	"	江崎さき・宮崎おとき	"

(1983. 10. 31. 受理)